

怪談 「耳なし芳一」の教訓

2013年8月7日

ラフカディオ・ハーンの民話「耳なし芳一のはなし」は有名な物語です。
この物語は単なる怪奇譚というよりも仏教説話ととらえてもよいかと思っています。
油断禁物・最後までしっかり仕上げることの大切さ。

人は、過ちを起こすものです。芳一の耳にも般若心経が書かれていたら耳はもぎとられなかったでしょう……

他にも脅しや甘い誘いに屈せず、自分の意志を貫く。人の話をよく聞きよく従う心。
人間の怨念の存在、なども、見えてくるような気がします。

むかしむかし、下関(山口県)に、阿弥陀寺(真言宗)というお寺がありました。その寺に、芳一(ほういち)という、びわ弾きがいました。芳一は幼い頃から目が不自由だったために、びわの弾き語りをしこまれて、まだほんの若者ながら、その芸は師匠の和尚(おしょう)さんをしのぐほどになっていました。
阿弥陀寺の和尚さんは、そんな芳一の才能を見込んで、寺に引き取ったのでした。芳一は源平の物語を語るのが得意で、とりわけ壇ノ浦の合戦のくだりのところでは、その真にせまった語り口に、誰一人、涙をさそわれない者はいなかったそうです。

そのむかし、壇ノ浦で源氏と平家の長い争いの最後の決戦が行われ、戦いに破れた平家一門は女や子どもにいたるまで、安徳天皇として知られている幼帝もろとも、ことごとく海の底に沈んでしまいました。
この悲しい平家の最後の戦いを語ったものが、壇ノ浦の合戦のくだりなのです。

ある、蒸し暑い夏の夜の事です。
和尚さんが法事で出かけてしまったので、芳一は一人でお寺に残ってびわの稽古をしていました。
その時、庭の草がサワサワと波のようにゆれて、縁側(えんがわ)に座っている芳一の前でとまりました。そして、声がありました。
「芳一！ 芳一！」
「はっ、はい。どなたさまでしょうか。わたしは目が見えませんが」
すると、声の主は答えます。「わしは、この近くにお住まいの、さる身分の高いお方の使いの者じゃ。殿が、そなたのびわと語りを聞いてみたいとお望みじゃ」「えっ、わたしのびわを？」
「さよう、やかたへ案内するから、わしのあとについてまいれ」
芳一は身分の高いお方が自分のびわを聞きたいと望んでいると聞いて、すっかりうれしくなって、その使いの者についていきました。
歩くたびに、ガシヤツ、ガシヤツと、音がして、使いの者はよろいで身をかためている武者だとわかります。

門をくぐり広い庭を通ると、大きなやかたの中に通されました。
そこは大広間で大勢の人が集まっているらしく、サラサラときぬずれの音や、よりのふれあう音が聞こえていました。
一人の女官(じょかん→宮中に仕える女性)が、芳一に言いました。
「芳一や、さっそく、そなたのびわにあわせて、平家の物語を語ってください」
「はい。長い物語ゆえ、いずれのくだりをお聞かせしたらよろしいのでしょうか？」
「…壇ノ浦のくだりを」「かしこまりました」
芳一は、びわを鳴らして語り始めました。ろをあやつる音。
舟にあたってくだける波。弓鳴りの音。兵士たちのおたけびの声。
息たえた武者が、海に落ちる音。これらの様子を、静かに、もの悲しく語り続けます。大広間は、たちまちのうちに壇ノ浦の合戦場になってしまったかのようです。
やがて平家の悲しい最後のくだりになると、広間のあちこちから、むせび泣きがおこり、芳一のびわが終わってもしばらくは誰も口をきかず、シーンと静まりかえっていました。

やがて、さっきの女官が言いました。「殿も、たいそう喜んでおられます。よい物を、お礼に下さるそうじゃ。されど今夜より六日間、毎夜そなたのびわを聞きたいとおっしゃいます。明日の夜も、このやかたにまいられるように。それから寺へ戻っても、この事は誰にも話してはならぬ。よろしいな」「はい」
次の日も芳一は迎えに来た武者について、やかたに向かいました。しかし、昨日と同じようにびわを弾いて寺に戻ってきたところを、和尚さんに見つかってしまいました。
「芳一、今頃まで、どこで何をしていたんだね？」
「……」 「芳一」 「……」

和尚さんがいくら尋ねても、芳一は約束を守って、ひとことも話しませんでした。和尚さんは芳一が何も言わないのは、何か深いわけがあるにちがいないと思いました。
そこで寺男(てらおとこ→寺の雑用係)たちに芳一が出かけるような事があつたら、そつとあとをつけるように言っておいたのです。

そして、また夜になりました。雨が激しく降っています。
それでも芳一は、寺を出ていきます。寺男たちは、そつと芳一のあとを追いかけてきました。ところが目が見えないはずの芳一の足は意外にはやく、やみ夜にかき消されるように姿が見えなくなってしまったのです。「どこへ、行ったんだ？」

と、あちこち探しまわった寺男たちは、墓地へやってきました。
ビカツ！
いなびかりで、雨にぬれた墓石が浮かびあがります。
「あっ、あそこに！」
寺男たちは、驚きのあまり立ちすくみました。
雨でずぶぬれになった芳一が、安徳天皇の墓の前でびわを弾いているのです。その芳一のまわりを、無数の鬼火が取り囲んでいます。
寺男たちは芳一が亡霊に取りつかれているにちがいないと、力まかせに寺へ連れ戻しました。
その出来事を聞いた和尚さんは、芳一を亡霊から守るために魔除けのまじないをする事にしました。
その魔除けとは、芳一の体中に経文をかきつけるのです。
「芳一、お前の人並みはずれた芸が、亡霊を呼ぶ事になってしまったようじゃ。
無念の涙をのんで海に沈んでいった、平家一族のな。
よく聞け。今夜は誰が呼びに来て、決して口をきいてはならんぞ。亡霊にしたがった者は、命を取られる。」

しっかり座禅(ざぜん)を組んで、身じろぎひとつせぬ事じゃ。
もし返事をしたり声を出せば、お前は今度こそ殺されてしまうじやろう。わかつたな和尚さんはそう言って、村のお通夜に出かけてしまいました。

さて、芳一が座禅をしていると、いつもの様に亡霊の声が呼びかけます。「芳一、芳一、迎えにまいったぞ」
でも、芳一の声も姿もありません。亡霊は、寺の中へ入ってきました。「ふむ。…びわはあるが、弾き手はおらん」
あたりを見まわした亡霊は、空中に浮いている二つの耳を見つけました。「なるほど、和尚の仕業だな。さすがのわしでも、これでは手が出せぬ。仕方ない。せめてこの耳を持ち帰って、芳一を呼びに行ったあかしとせねばなるまい」
亡霊は芳一の耳に、冷たい手をかけると、
バリツ！
その耳をもぎとって、帰っていきました。
その間、芳一はジツと座禅を組んだままでした。

寺に戻った和尚さんは芳一の様子を見ようと、大急ぎで芳一のいる座敷へ駆け込みました。「芳一！ 無事だったか！」
じつと座禅を組んだままの芳一でしたが、その両の耳はなく、耳のあったところからは血が流れています。
「お、お前、その耳は…」和尚さんには、全ての事がわかりました。「そうであったか。耳に経文を書き忘れたとは、気がつかなかった。なんと、かわいそうな事をしたものよ。
よしよし、よい医者を頼んで、すぐにも傷の手当てをしてもらうとしよう」
芳一は両耳を取られてしまいましたが、それからはもう亡霊につきまどわれることもなく、医者の手当てのおかげで傷も治っていきました。

やがてこの話は口から口へと伝わり、芳一のびわはますます評判になっていきました。
びわ法師の芳一は、いつしか『耳なし芳一』と呼ばれるようになり、その名を知らない人はいないほど有名になったという事です。